



(小田原)

野東縁部には、低位台地が

本遺跡の立地する足柄平
分の調査は今回がはじめて
である。

跡・千代仲ノ町遺跡・千代
南原遺跡と字名によって遺
跡を呼称している。千代南
原遺跡の調査は今回で七次
目の調査となるが、低地部

であり、調査地点も多く北側部分から千代光海端遺跡・千代北町遺

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

6 遺跡の年代 縄文時代～近世

5 遺跡の種類 遺物包蔵地

4 調査担当者 小出義治・小池 聡

3 発掘機関 小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団

2 調査期間 一九九八年(平10)二月～一九九九年三月

1 所在地 神奈川県小田原市千代

神奈川・千代南原遺跡第Ⅶ地点

あり、北から永塚・千代・高田の三つの台地面を形成する。台地上は、ほぼ全面が遺跡となつてゐる。永塚台地の東縁部に接する低地には、かつて木簡が出土し、足柄郡衙と推定されている下曽我遺跡があり(鈴木靖民「下曽我遺跡と出土木簡」本誌第三三号)、また今回調査地点の東側台地上には、千代廃寺の存在が推定されている。

今回の調査は、土地区画整理事業に伴う事前調査として行なつたものである。調査は、千代廃寺に最も近いA・D地区までの四地区で行ない、このうちC地区から、二点の木簡が、多量の土器・瓦・木製品等とともに出土した。C地区の調査では、延暦一九年(八〇〇)に降灰したと推定される火山灰純層下から土師器杯・甕、須恵器杯・蓋・高盤・甕・短頸壺・瓶や丸瓦・平瓦、铸造関連遺物、木製品では刀子形・鏃形・鳥形・琴柱形などの形代、斎串・さら棒などの祭祀具、下駄・箸状木製品・鈎針状木製品・刀子柄・針状木製品・曲物蓋・曲物底・刳物・丸木弓などの日常用具、かせなどの紡織具、大足・えぶり・田舟・鋤柄などの農耕具が出土した。これらの遺物は、八世紀第Ⅱ～Ⅲ四半紀頃のものとして推定される。

8 木簡の积文・内容

(1)

・「八月三日前遺米四斗五升二合」

・「八月四日」

(226)×34.5×4 019

(2) □ □ □ 運三遍積阿

□人麻呂

(237)×48.5×4 081

(1)は短冊形を呈するが、下端を欠損する。表面の墨痕は良好に遺存しているが、裏面はわずかに確認できる程度である。冒頭から月日を記載する記録簡であり、表裏で連続した月日の米の出納を記録している。規格性の高いカード形式の使用が想定される。

(2)は上下端とも欠損するが、幅広い木簡である。下端部の形状は、刀状を呈しているようにも観察され、二次的に加工されている可能性が高い。表面には、僧侶名(□運)と阿弥陀経などの経典の講読回数(三遍)が記載されていると考える。裏面は、判読不能部分が多いが、実務担当者名(□人麻呂)を記した文書木簡の末尾部分と考える。

(1)(2)とも台地上にあったと考えられる千代廃寺に密接な関連を持つ資料であろう。

木簡の釈文と解説は、国立歴史民俗博物館の平川南氏による。

9 関係文献

小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点発掘調査団『神奈川県小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点―千代台地南縁部における低湿地遺跡の発掘調査報告書』(二〇〇〇年)

小池 聡「小田原市千代南原遺跡第Ⅶ地点の調査成果」(『神奈川

地域史研究』一八 二〇〇〇年)

(小池 聡)



(赤外線画像)